特集5

# 二〇一七年度、松山市立子規記念博物館では子規・漱石・極堂の生誕一五〇年記念行事が満載！

松山市立子規記念博物館　館長　竹田　美喜

## 松山市立子規記念博物館の開館は？

昭和五六年（1981）四月、子規没後八〇年祭の年に開館。三年間の準備委員会は、子規を「俳聖子規」と奉ることから解放して「人間子規」を多面的に探求することをコンセプトとしました。「人間子規」探求のおかげで、多方面に興味を示した子規の研究や企画展の世界が広がりました。毎年恒例となっている特別企画展、夏季、冬季子規塾の講演者もこのコンセプトに力を得て非常に革新的な、最新の講演をされ、レベルの高さが評価されています。

松山市立子規記念博物館

## 子規と漱石と極堂の友情

正岡子規（常規・幼名升）と夏目漱石（金之助）、柳原極堂（正之）は、慶応三年（1867）生れで今年が生誕一五〇年となります。子規は漱石を「畏友」、極堂を「文友」と呼び、良きライバルでした。また、二人は結核に侵された子規を終生力づけ励ましました。

英文学者の漱石が『吾輩は猫である』『坊っちゃん』を発表し評判となったのは、子規に俳句作りの面白さを教えられたのがきっかけでした。極堂も、子規に強制的に俳句を作らされた一人でした。少年時代、書生時代、松山帰省時代の子規は極堂の『友人子規』に克明です。極堂は一二歳で地元『海南新聞』の記者となっており、二五歳で新聞『日本』の記者となった子規の先輩です。面白いのは、帝国大学の大学院まで進んだ漱石が大学教授への道を捨てて新聞人になったことです。新聞記者子規や極堂に影響されたところがあるでしょう。

極堂（左）・子規（中央）・漱石（右）

## 子規と漱石と極堂と「愚陀佛庵」

子規は、松山を愛し、松山の仲間たちも「明治俳界の首唱」と評された子規を誇りに思っていました。明治二八年の秋、日清戦争に記者として従軍し、結核が悪化、神戸、須磨で療養後、子規は松山の漱石の下宿「愚陀佛庵」に身を寄せました。子規が『日本』『小日本』の俳句欄に採り上げた「松風会」の俳人が「愚陀佛庵」に連日押しかけ、子規を囲んで熱気を帯びた句会や俳談が夜更けまで続きました。この時の句は、極堂が

『海南新聞』に掲載、日々、俳人たちは力をつけて行きました。もちろん漱石も極堂も入っています。漱石の「鐘つけば銀杏ちるなり建長寺」の句は、一ヶ月後、子規が奈良で詠んだ「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」に影響を与えたといわれております。「松風会」は子規たち俳句革新『日本派』の地方で最初の結社と認められています。

愚陀佛庵

## 子規・漱石・極堂生誕一五〇年記念行事の意義

昭和四一年（1966）の子規・漱石・極堂生誕一〇〇年記念に俳句大会、短歌大会、松山小中高校生俳句大会が始まりました。それから五〇年、子規顕彰全国俳句大会、同短歌大会へと発展し、全国でも有数の大会となっています。松山小中高校生俳句大会では、ご家族で三代目の受賞者が出るなど、五〇年の功績を実感しています。

また、企業や学校や道後温泉街などで、生誕一五〇年の行事がありました。たとえば、子規と漱石が道後を散策した一〇月六日は「子規・漱石の日」、道後界隈のウォーキングがありました。「坊っちゃん劇場」では「52days」を上演。「坊っちゃん賞」の授賞式もありました。漱石のアンドロイドが松山各地に出没。松山市極堂会によって極堂の辞世の句碑「吾生はへちまのつるの行き処」が井手神社に建ちました。

松山にいるのは「人間子規」。子規さんです。子規が嫌悪した「俳聖」を冠した子規が消えたことを確認できたのが、一五〇年の最も大きい意義でしょう。

## 子規・漱石・極堂生誕一五〇年記念の主な企画

一五〇年を記念して、四月に常設展示場（二、三階）をIT機器や映像を駆使して体験し、学べるものにリニューアル・オープン、「愚陀佛庵」「名品検索」「短冊をつくろう」、「絶筆三句」コーナー等々。人気です。

子規の誕生日の十月十四日は「子規・漱石・極堂生誕一五〇年記念式典」を行い、記念講演や「子規を松山から世界へそして未来へ」のテーマでシンポジウム。パネリストは坪内稔典、ロバート・キャンベル、神野紗希氏。司会竹田。特別企画展は四、五月に「子規・漱石・虚子―俳句革新の地・松山―」、特別展は八、九、十月に「子規博の名品」開催。講演各種。十一月には「全国俳文学会」を開催、同時に公開シンポジウム。研究面での成果も大でした。

子規・漱石・極堂生誕 150 年記念シンポジウム

## 子規記念博物館の評価と今後の展望

個人文学館としての規模と収蔵品（六万点余りの資料、子規の直筆資料は千点余り）は日本でトップ、世界でもロシアのトルストイ記念館、上海の魯迅記念館に並ぶと称されています。外国から俳句愛好家の来館も多く、世界に俳句を発信する拠点として一〇〇年二〇〇年後、より重要な館として在ることを目標としています。